

越前禅宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧 古源劬元について―

池田正男

はじめに

前稿^①で追補記事として「赤坂新善光寺」と題し「受法用心集」を紹介しておいた。その後の調査で新たな展開がみられたので稿を起こしてみたいと思う。

次いで越前出身の聖一派の古源劬元について佐藤秀孝氏の論考があり、要約しておく。

一 越前禅宗草創期における豊原寺との接点

豊原誓願房心定（豊原寺円福院心定上人）の著述が見出された。この僧の事歴を追及するとともに、禅宗草創期の事歴をもとに双方の関わりを追及してみたいと思う。

（一）豊原誓願房心定の事歴

「受法用心集」は誓願房心定の著述であり、二系統の伝本の所在が明らかとなり、その信憑性には疑いの余地がないものとなった。「受法用心集」^③より心定の事歴を抜き出しておこう。

①十八―二十一歳、蓮徳大徳のもとで諸の天等の法二十八尊を受け、大小口伝集六十四帖写しとる。

②二十一歳、嘉禎元年、英壕阿闍梨より十八道を受け、許可灌頂の受職を得る。

③二十五歳、延応元年夏、越中国細野の阿聖阿闍梨に秘密瑜祇等流法身三種の灌頂を受け、立川流の一流の秘書を悉く書きとる。

④二十八歳、仁治三年、道源大徳より中院一流伝法をなし、別流の瑜祇三重灌頂を受け、事相教相の秘旨を聴聞す。

⑤三十六歳、建長二年夏、赤坂新善光寺の僧、弘阿弥陀仏と出会い、三部経菊蘭の口伝七八巻を書写す。

⑥三十七歳、建長三年春、上洛、洛陽五条坊門地蔵堂で高野山宿老碩学の執行賢阿闍梨と即身成仏の義を談ず。

⑦三十九歳、建長五年春、高野山の玄覚阿闍梨に参じ、教相の秘書等を伝え、正智院の一流の口決随分隔心なく授かる。

⑧四十一歳、建長七年、醍醐金剛王院大僧正実賢の付法随一の弟子加茂の空観上人の門葉に入り、真言一宗の教相の大巻をうかがい学び、十八道・両界・護摩等を七ヶ年にわたり修業す。

⑨四十七歳、弘長元年春、入壇の素懷を遂げ、その大法秘法百余等を授かる。総じて十四ヶ年の功勞なり。

⑩五十四歳、文永五年、これまで醍醐の三流の中の三宝院流・金剛王院流・光明山の一流を金剛王院大僧正実賢より受け、融源阿闍梨慶円上人の二流は三輪上人宝篋上人より受け、勸修寺の流は顕良伯耆の阿闍梨より受け、壺坂の流は三輪の禅仁上人より受け、尊念僧都の流は高野の道範阿闍梨より受け、蓮道上人に遇つて小野の大事を面授口決す。さらに清水の唯心上人の付法にあい、広沢の保寿院の流を尋ね聞き、花蔵院尊勝院の流、真乗院の房円僧正、隆澄僧正の流などを訪ね、十八歳より五十四歳に至るまで三十七年間密教の修学に務む。

⑪同、「受法用心集」成る？

なお、建長二年（一二五〇）に心定は三十六歳であるから、建保二年（一二二四）の生誕となる。然るに別写本の付記に、

秘密法門上卷二十丁、豊原寺誓願坊法諱心定、人王八十四代順德帝建保三乙亥将军実朝治世越前国産矣、大血脉加茂如実下受

法人誓願号二円福寺心定上人一越前国豊原云々

とあつて、この記事は正確であり、心定「建保三年の生誕」を採ることとしたい。

（二）心定の越前での事歴

「白山豊原寺縁起」⁵⁾には誓願房心定の事歴が記されている。

後高倉院御宇、自寛喜元年天台之教法者勸一結之諸講演、現衆先達之年紀等被定置者也、已往者或付三井之碩徳一流之法文、或尋二法相之智者一致二装古鑽仰一畢、是皆任二各之意業一隨三面之所求一許也、然当寛喜之時代、尤可扇二本山之教風一之處、窺他寺之宗旨之条不可然之由自令衆議一同、已来如形兩流之跡於尋、東西之族少々在之歟、仍代々自山門一人師学頭於申下畢、但自興福園城両寺下向之儀、少々存之、雖然自餘者皆臨時之沙汰也、毎度三塔其他無動寺之碩徳違云々、

長吏者付二妙法院御門主一代々御管領也、御草深院御宇、建長元年仁密宗碩徳於本寺本山、其譽無隱事相教相之達者在之、号誓願上人^{実名心定}当寺圓福院之開山也、当初泰澄和尚請二神告一、靈龜二年二月十九日以二玄防僧正^マ為二授法之師一、從修二十一面秘法一以来、或成二就一三摩地一、或受二伝一陀羅尼^マ為二期之行業一遂安養兜率之本懷一畢、粵建長之比於二北国一以二邪法一称二正法一、以二外法一^{号二内法一族、}当国并近国仁令二充滿一之間、彼上人心定強歎二此事一、東寺醍

酬加茂高野仁多年令^二住寺^一、烈^二公請修法之人数^一、件邪法之
 鉢具以洛陽仁令^二披露^一之處、不^レ可^レ混^二正法^一之由、天氣依^レ
 在^レ之則当寺仁令^二下向^一、於^二国中之邪法^一者如^二所存^一絶^二血脉^一
 被^レ破^二印信^一畢、加賀越中両国者仰^二付五人御弟子^一悉被^レ破^レ
 之畢 邪法記両卷彼御作在^レ之、本寺本山随分許容之抄見云々、
 誠三昧発得之行者同於本尊之持者也、大僧正実賢
 仁者孫弟子如実上人仁者直弟六流相承之内、殊三
 宝院金剛王院於^二一流^一者被^レ究^二溯源^一云々、両流
 之内以^二三宝院流^一一山不朽之嫡流師資相承于^レ今嚴重也、凡灌
 頂曼陀羅供之儀式庭儀堂上之法則道場庄嚴之法具等本寺優如田
 舎不^レ共^二諸流^一存知勿論之最也、

要約を『白山を中心とする文化財』から引用する。平泉寺と豊
 原寺との間で度々確執があり、「当寺は往古三井寺につき、或いは
 興福寺に属していたが、寛喜元年（一二二九）より天台宗に一結し、
 学頭は叡山三塔無動寺より下向、長吏は妙法院門主の管領するところ
 となった。しかし、その後、醍醐三宝院の流を師資相承し、白山
 権現と深沙太王の信仰を軸に密教色濃い祈祷寺として推移した」。
 この画期となる働きをしたのが心定であった。以下その事歴を挙
 げておこう。

- ①心定は豊原寺円福院の開山である。
- ②建長の頃、北国にはびこる邪法（真言立川流）を正法に正した。
- ③心定は東寺、醍醐寺、加茂社、高野山に多年住した。
- ④心定の邪法を正す人となりが都で評判となり、叡慮により豊原

寺に下向し、五人の弟子をして加賀・越中にはびこる邪法を論
 断せしめた。

- ⑤心定は醍醐金剛院流と醍醐三宝院流の二流が相伝されたが、醍
 醐寺三宝院流を嫡流に師資相承し、一山不朽とすることとなつ
 た。

これらの記述の妥当性を検討してみたい。「教王護国寺文書」の「豊
 原寺東寺修造料足」抄出しておく。

浄瑠璃院	一貫文	地藏院	二百文	西方院	一貫文
教観房	一貫文	光仙房	二百文	来迎院	二百文
大染院	一貫文	円福院	一貫文	歓喜寺	五百文
吉谷寺	二貫文				

以上参拾四貫陸百文歟

自今以後、奉加物出来候者、如此注名帳追而可進之候、

文安貳年乙丑七月十八日 円福院（花押）

円福院は一貫文を納めるとともに、豊原寺を取りまとめる立場で
 あったことが知れ、文安二年時点でも円福院が豊原寺で中核的な存
 在であった。なお、同年五月には甲斐常治が豊原寺円福院に書を送
 り、東寺修造大勧進聖の下向のことをついて指南を乞うた。^⑦ 次い
 で同七月には東寺修造大勧進宝栄は府中奉行の一井・池田兩人と対
 面し、奉加廻文と案内者について相談し、^⑧ 国中平均として最低でも
 人別百文の奉加をするように府中兩人より国中の寺へ廻文を送って
 いる。^⑨

因みに豊原寺は越前の奉加額の四分の一を負担した。如何に巨大

寺院であったかを物語っており、「豊原三千坊」と云われる通り「平泉寺六千坊」に対抗し得ることを証している。

「白山豊原寺縁起」の記述は「受法用心集」の著者心定が活躍する建長年間とすることなど一致をみており、信頼できるものと考えられる。なお『白山を中心とする文化財』では、

当寺に伝わる縁起はその書風から江戸時代の書写であることが明らかである。成立年代は明らかではないが、代々当寺帰依事の記事の最後が「応永二十三年十一月二十七日征夷大將軍従一位行内大臣源朝臣（義持）御判被成下畢」になっているから、この縁起の製作時期が凡そ推定される。

とあって「白山豊原寺縁起」は中世末の成立であると考えられる。

（三）赤坂新善光寺

「受法用心集」から越前の動静を伝える記事を抽出しておこう。

三十六の年、建長二年の夏の比、小僧が庵室に越前赤坂の新善光寺の弘阿弥陀仏と云ふ僧来る。しばらく宿住し、日々に所々巡礼せし事、又知識に親近して修行の作法を見しありさまを数日間談ぜし、次に菩提心論の談議を求請しき。之れに依て四五日を経、勝義行願の主旨を授け畢りて後、件の僧出にき。其の後小僧又事の便り有りて彼の新善光寺に詣し時、弘阿弥陀仏の庵室に召請再三に及びしかば彼の室に望みて見れば経机の上に大なる袋を置けり。弘阿弥陀仏是れを開き巻物を取り出せり。其の数殆ど百余卷なり。小僧是れを開き見れば大旨越中国に流

布する処の立川の折紙どもなり。此の中に彼の内三部経菊蘭の口伝七八巻交れり。小僧初めて是れを見るに珍らしく此の巻物を借用して住所に帰てうつしをはりぬ。又此の書のありさま委細ならずして見あきらむる処なかりき

この著作者は豊原誓願房心定であるから、居所の豊原寺近傍に赤坂新善光寺があったことになる。

坂井市丸岡町赤坂の白山神社境内に板碑¹⁰があり、その銘文を挙げておこう。

新善光寺 石垣

勸進十方^施入

梵字カーン 永仁第二天甲午

仲春上旬作

願主 道阿弥陀仏

名阿弥陀仏

この碑は永仁二年（一二九四）に道阿弥陀仏と名阿弥陀仏が願主となり造立したもので、造立の地が赤坂であることから、この地に赤坂新善光寺があったことが前史料によって、より強固なものとなった。またこの碑が建立される四十四年前の建長二年に弘阿弥陀仏がこの寺に居住していたことが明らかとなった。

（四）中浜新善光寺

ところが永平寺の史料によれば、道元亡き後に懷焚は弘安二年（一二七九）四月の夏安居に中浜新善光寺に仮寓して四十五日余り滞

池田 越前禪宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧古源劬元について―

在し、頭陀行を行った⁽¹¹⁾。義雲は同年五月に中浜新善光寺で正法眼蔵の書写を行っている⁽¹²⁾。熊谷忠興師は、この中浜新善光寺は河合莊中浜で現在の福井市稲多浜町辺と推定される⁽¹³⁾、との見解を示している。

以上、赤坂新善光寺は少なくとも建長二年（一二五〇）から永仁二年（一二九四）間に存立していたことになり、中浜新善光寺は弘安二年（一二七九）にあった訳だから、新善光寺は赤坂と中浜に並立していたことになる。となれば、弘阿弥陀仏・道阿弥陀仏・名阿弥陀仏等の新善光寺の同門の僧はいずれにも関わっていたことであろう。また、懷契門下の頭陀行に参じた僧たちともども新善光寺の僧と交流があったことになろう。引いては豊原誓願房心定ともまみえたことが推定されよう。

蛇足ながら蛭山禅師の生誕地について『永光寺中興雜記』の「開山行狀記」に「多彌ハ越前丸岳ノ脇キトイハラノ下、多子ノ村ラ也⁽¹⁴⁾」の記述がある。「村ラ」、「脇キ」と送りかなを振っており、「越前丸岳ノ脇トイハラ」と読める。そして「トイハラ」は「豊原」が訛った記述ではなかろうか。つまり『永光寺中興雜記』が編まれた当時、豊原は衰退して久しい寒村であったため聞き取りが不十分であったとみたい。そして「越前丸岳」はどこを指すのか不明であるが、多彌神社のある山崎三ヶと田屋はそれぞれ隣接する谷に位置する村であり、豊原八社の本宮があつた旧蹟地は山崎三ヶと田屋との間の山上に所在する。よって多彌村の地理に合致する記述である。

また、蛭山禅師は豊原三千坊の直下の多彌で生誕し、子供時代を過ごした。当時は、豊原誓願房心定が豊原に三宝院流を広めた以降

であるから、少なからずその影響を受けていると考えられよう。

（五）永徳院義準

永平寺二世の懷契の法嗣の義準は道元亡き後、永平寺を去って真言宗に転じ、僧名を義能と改めた僧である。佐藤秀孝教授の著となる「越前永徳寺義準と意教上人頼賢⁽¹⁶⁾」を引いて、義準の事歴を追ってみたいと思う。

①生年は伝わっていないが、義介などと同世代であろうから、承久年間（一二一九～一二三二）前後の出生とみられる。

②道元示寂（一二五三）後、ほどなくして高野山金剛三昧院（禪定院）が台密禅を兼修しているのを知って参ず。

③ほどなくして意教上人（一一九六～一二七三）に師事し、高野山実相院で三宝院流を修す。

④越前の檀越が永徳院を開創し、第一祖に迎え、晩年には歓喜院に退去す。

⑤文永十年以前に醍醐流相承の第二十五祖の列位に任じられる。

⑥文永十年（一二七三）に意教上人を永徳寺に招き説法を請う。同十二月意教上人永徳寺で示寂す。

⑦その後、活動の拠点を播磨に移し、無量寿院再興し、真言宗の血脈を伝え、東密三十六流の一角を形成した人と伝う。

⑧意教上人頼賢には付法九人の弟子がいる。とりわけ実融・慈猛・憲静・義能（義準）は四天王と称される⁽¹⁷⁾。

⑨没地没年不詳

(六) 義準の越前での事歴

「無量寿院義能伝」¹⁸⁾があつて、義準（義能）の越前における事歴を載せている。

遂勸^二獎上人^一、令下請^二越州^一利濟群生上、義子坦負供奉、途路不^二空過^一、恣問^二所疑^一、師委說遣^二心開意解^一。便越州而請^レ嗣^二鉄塔相承醍醐的脉^一。上人慮^二護法大権^一思不^レ決、倏空中神現、少時隱^二雲間^一。師子俱感^二法徳^一許可、俾^レ繼^二燈火^一、又為^二二十五祖^一。教誡曰、諦聽、法身心印、釈迦文仏説、無^二最上機^一故不^レ能^レ伝。龍猛尊者曰、於^二諸教中^一闕而不^レ書。是故教外別伝、有^二金剛頂宗^一、無^二諸宗余乘典^一。仏世如是、矧乎末代劣器、輒豈得^二受伝^一。所以簡^二厭厥機根^一也。雖^二族姓高貴^一、無^二大心決定^一不^レ可^レ許。大機夙発之仁、若^二梅檀林^一、欽可^レ授焉。縱雖^二卑氏者^一、道心件堅固無^二性弱^一、譬如^二泥中蓮華^一、警可^レ与^レ之。壇下。弟子涙礼稽首言、生生世世縱碎身粉骨、曷報^二海滴之恩^一。迺創^二一精藍^一。作^二開山^一。以^二空中所感^一、鎮^二斎清滝権現^一、為^二護伽藍神^一。不^レ記^二寺地名^一、越州定有^二蹤跡^一歟。

佐藤氏の解説を引用する。

義能即ち義準は師の頼賢（意教上人）を越前永徳寺に請して衆生接化を願った。義準自身も自ら施財を奉じて供養奉侍し、頼賢から教えを受けたとされる。鉄塔の相承とは密教付法第三祖の龍猛菩薩（龍樹）が南天鉄塔を開き、金剛菩薩を拝して両部

大経を相承したという故事にちなみ、密教の秘義を伝える大事を指している。義準としては密教の極意を相承し、醍醐流の血脉を嗣ぎたい旨を頼賢に請うているわけである。頼賢が思いあぐねていると、空中に神が現じて瞬時に雲に隠れるという奇瑞が起こり、師資ともに法徳を感じて頼賢は義準を醍醐流相承の第二十五祖の列位に任じたと伝えられる。さらに頼賢が義準のためにした教誡のことばが載せられている。釈迦牟尼仏や龍猛尊者のことばの出典は定かでないが、頼賢としては真の教外別伝は金剛頂宗すなわち密教にあることを強調している。身分の上下によらず、道心の有無が問題であると告げて頼賢が壇を降りると、義準は生を変え身を変えても師恩に酬いたい旨を述べて稽首したとされる。義準が越州に一精舎を創建して開山になったことを伝えている。このとき義準は開創した寺院に清滝権現を鎮守して護伽藍神すなわち伽藍守護の護法神となしたとされるが、清滝権現とは娑羯羅龍王の第三女の善女龍王のことであり、密教においては如意輪観音の化身とされて守護神として尊崇されている。義準としては鎮守として清滝権現を祀ることとで、新寺を禪宗寺院とはせずに密教寺院として位置付けたことになろうか。ただし義準が開創した寺院の肝心な名称や所在した地名すら、記されておらず、越州にその遺跡があるのではないかと推測しているのに留まる。

池田 越前禪宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧古源劬元について―

(七) 清滝権現の探索

義準が開創し清滝権現を祀った寺院を検討したいと思う。

永平寺側の資料⁽¹⁹⁾では義準開創社寺は永徳院と歎喜院となっており、そのいずれかということになる。しかし歎喜院は義準退去の寺院として、清滝社を祀っていたのは永徳寺ということになる。なお、永徳寺は後に越前安国寺となった長楽寺の後を受けて康安二年に安国寺に指定され、諸山となっている。また、その所在地は不明であるが、諸資料から越前府中近傍は動かないであろう。清龍の地名を探ってみよう。

『越前国名跡考』では、

・ 清滝社（或は青龍セイリユウ）大野町枝清滝村
祭神 大国主命

大野町西に蛭子山あり。清滝と云う宮あり。

ある人云う。当社古より大野城地に在し所、金森五郎八戌山城を引き移さる時、今の所に遷し奉ると云う。

・ 大野郡清滝村（山崎本）

清滝権現境内の図（絵図略）

・ 清滝川

宝慶寺川ともいう。大野より東和泉庄を流れる川にて、そこに清滝森清滝堂といえる有によりての名なる由

『越前志』⁽²⁰⁾の「大野郡」に、

江戸ニテ大矢戸村ニ聞キシ説

一 清瀧堂ハ友江ノ川邊ニ在、此川ハ清瀧川と云

大野ハ伊振之間 茜川。大矢戸ハ辻橋ノ座（川縁離レ山二三

『角川地名大辞典』には

間半堂、氏神ナリ保奇）、大袋、蓬、比嶋。

・ 金津町清滝（坪江郷清滝村）

剣ヶ岳の西麓、清滝川の谷に位置する。上清滝の北東に寺跡がある。

小まとめ

永徳寺があつたと推定される越前府中（武生）近傍には清瀧の名残は認められない。金津の清滝村は豊原の北の3kmほどに近さであり、歎喜院の所在地としての可能性は残るであろう。

なお「清瀧」は川名や神名として大野に多い。宝慶寺谷より流れ出た川が禪師峰寺近傍で真名川に合流するが、その川は現在でも清滝川と称している。また「醍醐寺文書」には醍醐寺領の牛ヶ原庄（北庄・南庄）と牛ヶ原四箇郷（丁・中挟・井野部・庄林）が散見されるので、この名残であろうとみられる。その中で「越前国井野部郷百姓等申状」⁽²¹⁾を挙げておこう。

畏申上候、抑清瀧山事ニハ候テ、熊以飛脚申上候、此御山神木切候事、無勿鉢事候間、井野部御百姓等ハ、かつて切申候ハす候、丁ハ此間切られ候、（中略）丁御百姓往古ハ切来て候よし申され候、両方御百姓をめしのほせられ候て、たいこ社頭にて、神さいにて落居させられ候へく候、（中略）たいこにも。三宝山よりも御ゆるされ候支證ハあるましく候、返々神木の御事にて候間、如此申入候、（中略）三月二十六日、井野部御百姓等、

醍醐知院御坊中、

丁郷^{ようこう}は戌山の西方一帯であり、井野部郷は現大野市街地の北半分と比定されることから、その中間にある亀山が清瀧山であり、清瀧社があつたと考えられる。そのように考えると金森長近が戌山から亀山に城を移す際、清瀧社を現在地に移したとする伝承とも合致する。なお大袋、蓬、比嶋は遅羽村内であり、牛ヶ原庄でもないため、何故、大矢戸の辻橋清瀧堂の氏子が大袋、蓬、比嶋であつたのかは不明である。

なお『福井県神社誌』⁽²²⁾によれば、現在の清瀧社は大野市清瀧・同友江・同中挟の三社が認められ、いずれも醍醐寺領牛ヶ原庄の名残であるとみられる。

(八) 心定と義準との関係

建長年間から弘長年間、心定と義準は共に高野山にあつて、醍醐三宝院流を中心に学んでいる。心定は加茂の空観の門葉に入り、義準は実相院で意教から学んでいる。同じように若き日を越前で過ごした者同士が高野で相まみえたことが想起されよう。

なお、「受法用心集」の別本付記⁽²³⁾より、心定は建保三年(一二二五)の生誕となる。一方、義準の生誕は承久年間(一二一九―一二三二)とみられるから、心定がやや年長と考えられる。

そして文永年間には心定と義準は共に越前で活動をしている。共に三宝院流を相承していることから、双方が交流していたとみられる。心定は登りつめて豊原寺で統括的な地位にある。一方、義準は

永徳寺を中心に真言の普及に努めている。

前掲の「豊原寺東寺修造料足」に「歓喜寺」が豊原寺内として記されており、文安二年(一四四五)と二世紀を経た時点では、義準が府中近傍の地に興した永徳寺は五山派禪院に転じている中、同じ義準が興した真言宗寺院の歓喜院が豊原寺内に所在したことは、禪院に転ずる誘いを受けることもなく存立したとみえ、辺鄙な地に立地した所以であろう。義準は晩年に歓喜寺に退去したとある点からみて、喧噪な地を避けて退去の地を定めたと考えられよう。

ともあれ、義準が豊原寺内に歓喜院を興した可能性が高く、豊原誓願房心定とは深く関わり合った間柄であつたものと推定される。

(九) その後の円福院と歓喜院

冗長ながら心定が興した円福院と義準が興した歓喜院のその後を追つてみよう。

貞享・元禄年代の成立とみえる『越前国寺庵』⁽²⁴⁾を抄出する。

一 曹洞宗

河内 長禪寺

一 真言宗

高野ノ下 持宝院	東寺ノ下 寛祥院	高野ノ下 歓喜院	高野ノ下 不動院
三宅院下 花応院	丸岡 円福院	丸岡 宝積院	

一 天台宗

豊原 花蔵院

豊原寺は一向一揆の拠点となつたため制圧対象となり、壊滅的に

たたかれた。よって円福院は丸岡で再建されたとみえる。しかし歛喜院は所在地が付されていない。恐らく豊原ではなかったために戦禍を受けなかったものとみえる。天台宗豊原花蔵院が唯一豊原と付されているが、文安二年東寺奉加帳には寺名が見えない。この時点で天台に転じていたものか、或は天台を守り通していたのであろうか。また「高野ノ下」「東寺ノ下」「三宝院下」と付された寺院の記述も注目される。

なお、河和田長楽寺は『寺庵』に記載がなく、河内長禅寺がみえる。恐らく山上から山麓に拠点を移して禅宗寺院として創建されたものであろう。

さらに両寺を追ってみよう。

円福寺について応永二十一年の「瀧谷寺門徒之次第」⁽²⁶⁾には記載がないが、近世初期のものとみられる「瀧谷寺末寺之覚」⁽²⁷⁾には「丸岡円福院」と記されている。よってこの間に瀧谷寺末に転じたようである。さらに「瀧谷寺伝法灌頂職衆定書」⁽²⁸⁾には「円福院 護摩」と記され要職についている。その所在地については貞享二年の「瀧谷寺末寺帳」⁽²⁹⁾には「同所（丸岡）竹田口町円福寺」とあり、現在地が丸岡町巽二丁目であるから何かすっきりしない。しかし、円福寺の経緯については「愛宕宮円福院由緒記写」⁽³⁰⁾に詳しい。

愛宕宮之義者、第一軍事守護且火防護神に御座候而、往昔豊原惣山に勧請有之候処、天正四年柴田伊賀守殿篠岡山に遷鎮、其節四方八間半同坂之左右共八間半之社地并御供米拾俵御寄附之上神殿御造営二相成、御領内中火防護神二御座候、尤神体

之義者勝軍地藏尊之木造二御座候、其後寛文中前城主本多飛騨守殿御代、改而如元之御寄附二相成候、猶又御当代二至り、元禄十三年清純様御代、改而如前御寄附相成候事、右者古来拙院別当仕来候得者、仏具等之義者於宗意相用來候、今般御調二付此段御達申上候、以上、辰四月、円福院、寺社御奉行様
しかるに明治十三年の『阪井郡寺院明細帳』⁽³¹⁾には

越前国坂井郡丸岡十番地字巽町

越前国坂井郡瀧谷村本寺瀧谷寺末

真言宗新義派 円福院

一 本尊 大日如来

一 由緒 当院開基不詳―建立年号不詳（異筆）創建年月日等

不詳ト□云候

当国坂井郡豊原惣山ノ内一院ニテ有之候処天正四年
柴田勝豊時代当丸岡工城引ノ節愛宕大権現別当トシ
テ城下竹田口町エ引移シ相成愛宕社ハ城下篠岡山江
社地并社料寄附ニテ建立当院ハ別当并祈願所ニテ有
之候事（異筆）トナリタルト云

一 境内仏堂 一字

地藏堂

本尊 勝軍地藏

由緒 当本鉢ノ儀以前ハ愛宕大権現ト勧請ニテ軍事守護且
火防護神トシテ柴田勝豊時代豊原山ヨリ当丸岡城下字篠
岡山遷鎮有之候処明治五年壬申年勝軍地藏ト改唱ニテ当院

境内ニ遷座相成ル居候事

(後略)

また明治期成立の『寺院台帳』³²⁾を見ると、

一 真言宗 円福院 瀧谷寺末 丸岡町巽

由緒沿革 当山ハ往昔天正四年当国坂井郡篠岡山ニ鎮座スル処ノ將軍地藏尊ハ泰澄大師ノ御作ニテ天下泰平五穀成就諸人快楽ノ為ニ勧請シ奉ル処ナリ。其ノ後元禄八年有馬候仰信セラレシ時篠岡山ヨリ当町字巽ノ地ニ遷座シ玉ヘシトナシ勝軍地藏尊ヲ鎮祭スル事ハ仁王四十九代光仁帝ノ御宇大徳ノ聞ヘアル和列ノ慶俊僧都勝軍地藏尊ヲ彫刻シテラレタノデアル。

とあつて遂に豊原からの移転については触れられていない。ましてや開山が誰かということも忘れ去られてしまった。

ともあれ、心定が興した豊原円福院が現在に至る迄連綿と存続されてきたことは奇跡としか言いようがない。

歎喜院について近世初期のものとみられる「越前国真言新義諸寺院印形留帳」³³⁾には「同所(福井)歎喜院 無住」とある。

「越前国名跡考」には足羽郡真言宗寺院の項に「中島に在、五大山明王寺 観喜院・薬師如来 白山堂 川上御前 新屋敷家中北ノ端に在り 寛文十一年城ノ橋にて寺地二百十六歩被下貞享四年今の所四百六拾歩替地衰下(拾遺録)³⁴⁾」と記し、福井にその足跡を残している。

とすれば、義準は福井に歎喜院を構えたともみられまいか。否、義準が退去寺院として構えた院房であるし、その後、五山系禅院とし

て誘いもなかったことからみて、筆者は歎喜院の元の所在地は山里が妥当と考えるものである。また福井に転じざるを得ない状況があったとみれば、円福院と同様に豊原内に所在したとも考えられる。ともあれ、その後の歎喜院の足跡は、ここで途絶える。福井歎喜院は「無住」或は「衰下」とあるため、ここで終息したものとみられる。

(二〇) 禅宗草創期の動静

豊原円福院心定と歎喜院義準の動静をみてきたが、越前の禅宗草創期の動静からみて、その影響を受けたかを検討してみたいと思う。

・真言系の片山真光寺の阿闍梨の弟子や丹生北の海受房は数巻の秘記を保有しており、新しい教えにも目を向けていたようだ。

・赤坂新善光寺の弘阿弥陀仏や豊原寺にあった若き日の心定は当時、越中などで隆盛となった真言立川流に傾くなど、比較的自由な風土であったとみえる。

・義雲が下火に赴いた長楽寺(開山円機)³⁶⁾は文安二年(二四四五)の東寺修造奉加に加わっているが、どこにも属さない独立寺院とみられることから兼密禅の寺院であった可能性が考えられる。そしてこれより前の(康安二年(一三六二)以前)に長楽寺は安国寺に指定されたが、円機開山時点からの伏線があったとみたい。因みに「東寺修造料足」では「河和田吉水山長楽寺」とあるから、義雲は宇坂峠を越えて一乗谷辺を通過して長楽寺に入ったとみられる。

・総じてどの宗派も統制が行き届いている状況とはみられず、比較

池田 越前禅宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧古源劬元について―

的自由な風土であったようだ。

・日本達磨宗の開祖の能忍が摂津中嶋に開創した三宝寺の寺号からは醍醐三宝院を連想するが、その実、三宝寺で密教が研鑽されていたことが推測される史料が指摘されている。⁽³⁸⁾とすれば、波着寺でも三宝院流が研鑽されていた可能性がある。

・一方、文永八年(一二七二)に波着寺で拈掇が阿婆縛抄を書写した奥書から、波着寺が天台系の儀軌を伝える重要な寺院であったことを暗示するとの指摘がある。⁽³⁹⁾しかし、寛喜元年(一二二九)に豊原寺が天台宗に転じたこととリンクするとはみられまいか。とすれば文永八年に波着寺が天台系であり、覺晏が多武峯より波着に移った時点では真言系であったとしても矛盾はない。

・文安二年の東寺修造料足には天台に属する寺院が含まれている。

つまり、大瀧寺東寺修造料には「此寺は顕宗在所なりといえども、御勧進に依り内々心落し、形の如く挙げて奉加せしむるものなり」とある。これは守護代の甲斐氏の力を頼りにせざるを得なかった訳だが、天台に属する平泉寺対策だったのではなかったか。このことはとりもなおさず、現在は天台に属してはいても過去に真言に属した経緯がある寺院や兼密禅である寺院も奉加に加わったことであろう。

・大野の禪師王寺山の西方にある行人窟には「並月寺住乗楽坊・最妙坊⁽⁴⁰⁾」と刻んであり、波着寺には山岳修験僧が住していたとみられる。

・醍醐寺領牛ヶ原庄内の亀山に清滝社が祀られており、牛ヶ原庄の

境界上に禪師王字山・大光寺・行人窟があることも注目される。

・波着寺で拈掇が阿婆縛抄を書写したり、某が文永十年に正法眼蔵を書写している。一方、弘安二年に中浜新善光寺で懷奘が頭陀行を行い、義雲は正法眼蔵を書写している。両所ともそれぞれ足羽川の渡し、九頭竜川の渡し、乃至は船着き場の近傍地であり、托鉢やお布施を受ける場所として好適な場であった。こうした場で各宗派の僧や修験僧との出会いや交流があったようだ。

・義準の場合は初め高野山の台密禅に近づいている。また義準が開創した永徳寺は延慶四年(一一三一)に、寂円が開いた妙法寺は正和三年(一一二四)に、ともども兼密禅を専らとする仏源派の秋潤道泉によって五山派禅院に転じていった。⁽⁴¹⁾このように兼密禅が密教系の寺院や僧たちの勧誘に効果的であったようだ。また、そのどちらかに転化しやすい状況であったのでないか。

・越前の五山派寺院の妙法寺・永徳寺・長楽寺はすでに述べた。さらに日円寺は覚念が道元示寂の室の柱を持ち帰り、塔婆として別印に建立した⁽⁴²⁾、弘祥寺は義演が開創した常在院を礎として建立したという。

以上のように越前の五山派寺院のすべての創設に道元会下が関わっていたことは注目される。さらに日円寺には利生塔があった可能性があり、能登永光寺の利生塔も併せて考慮すべきであろう。

まとめに代えて

・波着寺や中浜新善光寺は諸国を巡る修験僧などによるネットワーク

クの拠点として機能していたと考えられる。

・能仁や榮西も兼密禅であったし、義準も当初は台密禅に近づいていた。また妙法寺や永徳寺の長老は兼密禅を専らとする秋澗道泉のもとで上堂を遂げたことが五山派禅院化への嚆矢となったようだ。

・永平寺においては如浄の教えは群を抜いて厳格なものであったから、ネットワークにより得られた臨済宗や諸宗の情報は、現在の北朝鮮のような状況に似ていると思える。つまり、懷奘は道元亡き後、動揺する檀越や僧たちに対する対応を練るためにも臨済宗や兼密禅の動向や具体的な内容把握に努める必要があったと考えられる。

・否応なしに、多かれ少なかれ豊原寺の影響を受けていたとみられ、就中、豊原円福院心定と歙喜院義準の動向が注目されていたとみられる。

・以上「豊原寺の動静が禅宗草創期の僧たちに影響を及ぼした」ことを立証することはできなかったが、注目されていたことは、諸々の記事から明らかであろう。

(一) 関係年表

建保三年（一二二五）誓願房心定生誕、越前産
承久年間（一二二三）義準生誕、越後産
貞応二年（一二二三）四月、道元、入宋
嘉禄三年（一二二七）八月、道元、肥後川尻帰着

安貞二年（一二三八）七月、如浄、示寂

安貞二年（一二三八）覺晏、多武峯より波着に移る

寛喜元年（一二二九）豊原寺、天台宗に転じ、叡山無動寺より学頭を迎え、妙法院が長吏を管領す

嘉禎二年（一二三六）十月、山城興聖寺開堂す

仁治二年（一二四一）春、懷鑑一門、道元門下に加る

寛元元年（一二四三）七月、道元、越前に下向し、吉峰頭に在す

寛元二年（一二四四）十一月、道元、傘松峰大仏寺僧堂の上棟式を挙ぐ

建長元年（一二四九）八月、波着寺懷鑑、示寂

建長二年（一二五〇）夏、心定、赤坂新善光寺弘阿弥陀仏を訪う

建長三年（一二五一）春、心定、上洛す

建長五年（一二五三）春、心定、高野山玄覺に参ず

建長五年（一二五三）七月、懷奘、永平寺入院

建長五年（一二五三）八月、道元、示寂

建長七年（一二五五）頃、義準、高野山金剛三昧院を訪う

建長七年（一二五五）心定、加茂の空観の門業に入る

正元元年（一二五九）義介、入宋

弘長元年（一二六一）春、心定、入壇を遂ぐ

弘長元年（一二六一）寂円、銀椀峯に入る

弘長二年（一二六二）義介、帰着

文永四年（一二六七）四月、義介、永平寺入院

文永五年（一二六八）心定、受法用心集著す

文永五年（一二六八）頃、心定、命により豊原寺に下向し北国の邪法を正す

文永五年（一二六八）頃、心定、その功により円福院を開創し開山とす

文永五年（一二六八）頃、豊原寺、これ以降醍醐三宝院流を師資相承す

文永五年（一二六八）頃、螢山禪師、多欄村で生誕

文永八年（一二七二）一月、波寄拵浪、阿婆縛抄を書写す⁽⁴³⁾

文永九年（一二七二）二月、義介永平寺退院、懷契再入院

文永十年（一二七三）十月、某、波着寺で正法眼藏書写す

これ以前、義準、越前に永徳院を草創す

これ以前、義準、師の意教上人を請じて説法す

文永十年（一二七三）十二月、意教上人、永徳寺で示寂

これ以降、義準、活動拠点を播磨に移す

弘安二年（一二七九）五月、懷契、中浜新善光寺で頭陀行を行う

弘安二年（一二七九）義雲、中浜新善光寺で正法眼藏書写す

弘安三年（一二八〇）八月、懷契、示寂

弘安六年（一二八三）義介、大乘寺に住す

弘安十年（一二八七）義演、永平寺入院

永仁二年（一二九四）道・名阿弥陀仏、赤坂新善光寺に板碑を建立す

正安元年（一二九九）九月、寂円、示寂

延慶二年（一二〇九）九月、義介、示寂

延慶四年（一二二一）二月、永徳寺長老と庵主が大慶寺の秋澗道泉で上堂

正和三年（一二三四）八月、妙法寺長老が大慶寺の秋澗道泉で上堂を遂ぐ

正和三年（一二三四）十月、義演、示寂

正和三年（一二三四）十二月、義雲、永平寺入院

二 古源邵元について

（一）邵元の事歴

佐藤秀孝氏の「入元僧古源邵元の軌跡」⁽⁴⁴⁾の論考を基に邵元の事歴を要約しておこう。

①邵元は永仁三年（一二九五）に越前に生まれる

②初め曹洞宗宏智派に入り、契源と名乗る

別源円旨とほぼ同年で同一の派に属す

③聖一派に転じる

④入元し崇聖寺の樵隱悟逸に参学（三十三歳）

⑤天台山華頂善興寺の無見先観下に参学

⑥天目山の断崖了義下に参学

⑦伏龍山の千巖元長下に参学

⑧荊州玉泉寺で首座となる

⑨嵩山少林寺で首座となる

⑩少林寺と泰山靈巖寺で碑文を撰す

⑪ 在元二十一年の修学を終え帰国（五十三歳）

⑫ 帰国後、邵元は天龍寺で夢窓会下の契源の旧名で首座を勤め乗
 払を行う

⑬ 山城大聖寺に開堂出世し、双峰に嗣承香を炷いて正式に聖一派
 桂昌門派入りを表明

⑭ 山城等持寺へ入寺

⑮ 東福寺へ初住

⑯ 播磨法雲寺へ入寺

⑰ 東福寺へ再住

⑱ 南泉庵へ退居

⑲ 南泉庵で示寂（寿七十歳）

（二）邵元に関わる特記事項

① 邵元の出生は越前・源氏だということ以外には何ら伝わって
 ない。

② 鎌倉末期に宏智派と聖一派の交流が活発であり、邵元が聖一派
 に転じることに軋轢はなかったようだ。

③ 元の崇聖寺の悟逸のもとに参じたのは、日本に渡来していた清
 拙正澄は法弟にあたることから、正澄の紹介状をたずさえての
 ことではなかったか。

④ 当時、元では宏智派は衰退期にあり、良師巡り合うことができ
 なかったことと、邵元は純粋性を重んじたことによる参学で
 あったようだ。

⑤ 邵元が撰した石碑が少林寺に二基、靈巖寺に一基、現存する。
 邵元は詩文に精通していた上に、能筆家としても知られた存在
 であった。

⑥ 帰国を決断したのは越前に残した母親のことを夢に見たことで
 あったが、帰国した時には既に母親は他界しており、夢を見た
 日が母の逝去日であったという。

⑦ 邵元の名は在元中に用いられていたが、聖一派の南山士雲や双
 峰宗源の門下の系字としては不自然である。在元中に契源を改
 め邵元と名乗ったのではないか。

⑧ 帰国後に、天竜寺の夢窓会下で旧名契源で乗払を行ったのは、
 夢窓の勧誘があったことを物語っている。かつての縁故から聖
 一派に留まるべきか。宏智派に戻るべきか。夢窓の誘いを受け
 るべきか。この時期、身の振り方を思い悩んでいた時期ではな
 いか。

⑨ 山城大聖寺への入院に「衆議」と記されていることについて、
 双峰が大聖寺の開山となっていることから、聖一桂昌門派の大
 衆が大聖寺への開堂出世すべきことを邵元に迫ったことを意味
 しているのではないか。

⑩ 等持寺入院について、聖一派に帰属することを表明した後も、
 夢窓の信任が篤かったことを物語っている。

⑪ 東福寺への初住は観応二年末か、文和年間の始めとみられる。

⑫ 播磨法雲寺への入院について、雪村と邵元はともに北地禅宗界
 の動静を確かめた数少ない入元僧であったわけで、その縁故か

ら既に亡き雪村（一山派）が開創した法雲寺に招かれたのではないか。

⑬東福寺への再住は一条経通が邵元を敬慕する念が強いためによる。

⑭東福寺への再住期間は延文四年後半から同五年頃まで。

⑮「関東諸老遺稿」に関東の宏智派の東陵・不聞及び宏智派ゆかりの中厳に交じって邵元の作も含まれている。（延文五年以前）

⑯南泉庵への退居は康安元年頃。

⑰「古源和尚伝」は曹洞宗宏智派や臨済宗夢窓派との関わりなどをことさらに記さず、また在元中の北地曹洞禪者との道交についても何ら触れるところがない。つまり邵元と中国・中国の曹洞宗との関わりを一切記しておらず、聖一派における位置付けのみに終結している感が強い。

⑱邵元の徒弟には南源昌詵と徳海昌輝

⑲現存する墨蹟は、福岡県勝福寺に夢窓の頂相に邵元の像賛、正木美術館に白衣観音図に邵源の賛、同館に邵元揮毫の正法眼蔵涅槃妙心の墨蹟がある。

⑳三山曇伊和答建仁寺諸老軸に池易昌詵とあるのは南源昌詵のことでないか。

日州龍興山大慈禪寺八景に東福源輝、

三山曇伊和答建仁寺諸老軸に赤城源輝

とあるのは共に徳海昌輝でないか。

(三) 邵元に関わる年表

弘長三年（一二六三）	双峰宗源生誕
弘長四年（一二六四）	秋潤道泉生誕
弘安七年（一二八四）	龍山徳見生誕
弘安七年（一二八四）	無徳至孝生誕（越前平吹産）
正応二年（一二九〇）	雪村友梅生誕
永仁二年（一二九四）	別源円旨生誕（越前片上産）
永仁三年（一二九五）	秋潤東福寺後堂主座
永仁三年（一二九五）	古源邵元生誕（越前産）
嘉元三年（一二〇五）	徳見入元（二十一歳）
嘉元三年（一二〇五）	秋潤東福寺前堂主座（四十一歳）
徳治元年（一二〇六）	無徳東福寺で虎関と問答（二十二歳）
徳治二年（一二〇七）	雪村入元（十八歳）
延慶元年（一二〇八）	東明慧日渡来
延慶三年（一二一〇）	永徳寺長老大慶寺上堂
正和三年（一二三四）	妙法寺長老大慶寺上堂
元応二年（一二三〇）	別源入元（二十六歳）
元享三年（一二三三）	秋潤示寂（寿六十一歳）
嘉暦元年（一二三六）	清拙正澄渡来
嘉暦二年（一二三七）	古源入元（三十三歳）
嘉暦二年（一二三七）	雪村帰着（三十七歳）
元徳二年（一二三〇）	別源帰着（三十六歳）
建武二年（一二三五）	双峰示寂（寿七十三歳）

応永十年（一四〇三）朴堂祖淳加賀崇聖寺入院

「月篷四見」

あとがき

インターネットで「受法用心集」を見付けて、前稿に載せておいた。その後、豊原寺に関する資料を渉猟していたが、はかばかしくなかった。

そうした折、熊谷忠興氏より赤坂白山神社板碑の銘文の問い合わせがあり、「弘阿弥陀仏と受法用心集に導かれて」と題する論考を執筆中であることを知った。筆者が蒐集しておいた資料を提供し、いろいろお手伝いをする中、大きく進展させる史料を見出すことができた。筆者の研究テーマと重なる部分があり、熊谷氏の同意を得て、この稿を記した次第である。そのお手伝いが筆者のテーマを大きく推し進めたとし、義準との関わりを見出したのは熊谷氏であり、他にも多くを御教授戴いた。紙面を借りて厚く御礼を申し上げる。

なお、脱稿の後、二件の新資料を見出したので付記しておく。

①『天隠語録』に沙門周思と題して文明年間に豊原南谷に文殊堂を新構したとある。⁽⁴⁵⁾

②平成二十六年十月に福井県立博物館に於いて「白山曼荼羅」展が開かれ、岐阜県美濃市長蔵寺蔵の白山三社本地仏図の裏面貼付け文書によって永正十三年豊原寺で製作されたものであることが判明したとの知見が示された。⁽⁴⁶⁾

また、当稿は一時期をピンポイントで記したものであるが、豊原寺の一次資料を元にロングスパンでとらえた論考がある。紹介して

おく。⁽⁴⁷⁾

注

(1) 「三里山を取り巻く泰澄開創社寺について下」(『若越郷土研究』第五八巻二号、二〇一四年)。

(2) 「受法用心集」(守山聖真『立川邪法とその社会的背景の研究』碩文社、一九九七年、五三〇頁)、末木文美士「高山寺本『受法用心集』について」(『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集 平成十八年度』高山寺典籍文書総合調査団、二〇〇七年)、末木文美士「高山寺本『受法用心集』の翻刻研究一―四」(『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集 平成十九―二十二年度』高山寺典籍文書総合調査団、二〇〇八―二〇一一年)。

(3) 彌永信美「いわゆる『立川流』資料集」(http://www.bekkoane.jp/~n-iyang/buddhism/fachikawaryu/joho_yojinsuh.html)。

(4) 注(3) 三三頁。

(5) 「豊原寺縁起」(文化庁編『白山を中心とする文化財 福井県』文化庁、一九七二年、七八―七九、一〇〇―一〇一頁)。

(6) 「越前国豊原寺東寺修造料足奉加人数注進状(教王護国寺文書)」(『福井県史 資料編二 中世』福井県、一九八六年、二三頁)。

(7) 「甲斐常治書状案(東寺百合文書)」(『福井県史 資料編二 中世』福井県、一九八六年、一四七頁)。

(8) 「東寺大勧進宝栄書状」(『福井県史 資料編二 中世』福井県、一九八六年、一四八頁)。

(9) 「池田勘解由左衛門尉・一井帯刀左衛門尉連署奉書」(『福井県史 資料編 二 中世』福井県、一九八六年、一四八頁)。

(10) 清水邦彦・古川登「赤坂白山神社の板碑の検討」(『日引』一三三、二〇一二年)。なお、筆者の聞き取りによれば、赤坂在住の古老田中氏(八十歳代)は父から聞いた話として「白山神社から南一〇〇m程の畑(現在は杉林)に当板碑があった。元あった場所には、石仏を置いた」という。その旧地を案内していただいた。南北に延びる街道より道幅一間ほどの大門口が五〇m東に延び、田地より一mほど高さで西面する台地が築かれ、大門口より五mほど北方の台地上端に高さ四〇cmほどの座像石仏が置かれていた。

(11) 「二祖契禪師 永平寺三租行業記」(『諸本対校永平開山道元禪師行狀建 摺記』大修館書店、一九七九年、一六〇頁)。

(12) 河村孝道「義雲禪師と『正法眼蔵』鑽仰」(熊谷忠興編『義雲禪師研究』永平寺祖山傘松会、一九八四年) 一五三頁の註記(17)、石川力山「義雲禪師伝の研究」(『義雲禪師研究』一八五頁)。

(13) 熊谷忠興「道元禪師越前入りの一考察」(『宗学研究』四五号、二〇〇三年、一〇九頁)。

(14) 松田文雄「懷観大姉伝再考」(『宗教学論集』一三三、一九八七年、二九八頁)。

(15) 「越前国名跡考」には「種村・山崎村・江添村を載せるが、注記に貞享の図に種山崎村と載せ高を一集し分村二村」とある。

(16) 佐藤秀孝「越前永徳寺義準と意教上人頼賢―義準の永平寺僧団離脱後の動静について―」(『宗学研究』四五号、二〇〇三年、一一五―一二〇頁)、同「永徳院義準と無量寿院義能―義準の永平寺僧団離脱事件について―」(『平井俊

榮博士古稀記念論文集刊行会編『三論教学と仏教諸思想―平井俊榮博士古稀記念論集』春秋社、二〇〇〇年、四八九―五一一頁)。

(17) 意教頼賢の付法九人の弟子の略記。実融…金剛三昧院十二世証道上人実融(初名静空)、慈猛…下野薬師寺(天下三戒壇の一つ)などに住した良賢慈猛(留興長老)、憲静…泉涌寺や鎌倉大楽寺に住した願行憲静(円満)。他に蓮華三昧院に住した入仏明遍(初名空阿)、醍醐寺などで学講を勤めた阿日(阿月)、想観思、寛真。

(18) 注(16)『三論教学と仏教諸思想』五〇四頁。

(19) 「日本洞上聯燈録」第一のうち「越前州永徳院義準禪師」(『大日本仏教全書 第七〇巻』鈴木学術財団、一九七二年、三一〇頁)。

(20) 坂野二蔵「越前志」(福井大学付属図書館蔵複写本(高橋好祝蔵本))。

(21) 『福井県史 資料編 二 中世』(福井県、一九八六年、三七三頁)。

(22) 『福井県神社誌―御大典記念』福井県神社庁、一九九四年、三七二、三七五頁。

(23) 注(4)と同じ。

(24) 康安二年八月に越前安国寺長楽寺を廃し、永徳寺が安国寺に指定される。「足利義詮御判御教書(尊経閣文庫)」(『福井県史 資料編 二 中世』福井県、一九八六年、七一〇頁)。

(25) 「越前国寺庵」杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書下』松見文庫、一九七三年、四〇四頁)。

(26) 「瀧谷寺門徒之次第」(土屋久雄編著『瀧谷寺の文書と寺宝』滝谷寺、一九八四年、六六頁)。

(27) 「瀧谷寺末寺之覚」(『瀧谷寺の文書と寺宝』九八頁)。

池田 越前禪宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧古源劬元について―

若越郷土研究 五十九卷二号

- (28) 「瀧谷寺伝法灌頂職衆定書」(『瀧谷寺の文書と寺宝』一〇一頁)。
- (29) 「瀧谷寺末寺帳」(『瀧谷寺の文書と寺宝』一〇八頁)。
- (30) 「愛宕宮円福院由緒記写」(『瀧谷寺の文書と寺宝』一四〇頁)。
- (31) 「阪井郡寺院明細帳」福井県立図書館蔵。
- (32) 「福井県寺院台帳 坂井郡(国立史料館蔵影写本)」福井県立図書館蔵。
- (33) 「越前国真言新義諸寺院印形留帳」(『瀧谷寺の文書と寺宝』一一九頁)。
- (34) 『越前国名跡考』(福井県郷土誌懇談会、一九五八年、四〇八頁)。
- (35) 注(3)二四頁。
- (36) 「義雲和尚語録」(『曹洞宗全書 第一〇 語録一』曹洞宗全書刊行会、一九三八年、一九頁)に「長楽開山円機和尚下火」とある。
- (37) 注(24)に同じ。
- (38) 中尾良信「達磨宗の展開について」(『禅学研究』六八号、一九九〇年、八三頁)。
- (39) 石川力山「越前波着寺の行方」(『宗学研究』二八号、一九八六年、一二二頁)。
- (40) 拙稿「越前の禅宗草創期について」(『若越郷土研究』五三卷一号、二〇〇八年、三一頁)。
- (41) 「秋潤泉和尚住鎌倉縣靈松山大慶禅寺語録」(『五山文学新集 第六卷』東京大学出版会、一九七二年、二二頁)。
- (42) この記述は「建撕記」に依るが、「建撕記」が成立した時点で、別印の日円寺は五山派の諸山位を得て繁栄している。建撕がこの記述を挿入したのは、豊原寺が平泉寺にとった態度に似ている。つまり豊原寺信西が嘉祥三年(八五〇)白山参詣の途次、平泉寺に三所社壇しかないのを見て、豊原寺住侶を率いて講席を設けたことが平泉寺の濫觴であると、豊原寺を追

- い抜いて隆盛を誇っている平泉寺に豊原寺が主張している態度に似ている
- 「白山を中心とする文化財」七九頁。
- (43) 「阿婆縛抄」のうち延暦寺灌頂行事の奥書(『大日本仏教全書 第五七卷』鈴木学術財団、一九七一年、六五頁)。
- (44) 佐藤秀孝「入元僧古源邵元の軌跡(上)」(『駒沢大学仏教学研究紀要』五四号、一九九六年)、同「入元僧古源邵元の軌跡(中)」(『駒沢大学仏教学研究紀要』六〇号、二〇〇二年)、同「入元僧古源邵元の軌跡(下)」(『駒沢大学仏教学研究紀要』六一号、二〇〇三年)、同「入元僧古源邵元について―嵩山少林寺から京都東福寺へ」(『宗学研究』三八号、二二八―二三八頁)。
- (45) 「天隠語録」(『続群書類従 第二三輯上 文筆部』続群書類従完成会、一九〇七年、一一頁)。
- 大日本越前州沙門周思。平生深信根於曼殊大士、處々靈蹟、僉杖頭翫具也、嘗擇豊原南谷、新構文殊堂、以莊嚴佛土、(中略)文明甲辰初冬念二日、就新豊精舎、(後略)
- (46) 「解説五一 白山三社本地仏図(白山本地仏曼荼羅)」(『白山曼荼羅―描かれた神々と観音信仰―』(福井県立歴史博物館、二〇一四年、一〇八頁)。
- 「裏面貼り付け墨書二」
- 奉寄進 白山三所御本地一鋪
- 右御本尊者依為師近院主清尊法印(号財圓房□末)持尊某、雖奉感得之為豊原寺御常樂會、聖衆徒方房内勤行御本尊惣寺江奉寄進之處也、伏乞令法旧住寺院繁昌云々

永正十三年丙子二月九日

願主権小僧都頭成（学頭代 □□院）

「裏面貼り付け墨書」

奉修復常樂會御本尊一鋪

右享祿三年庚寅二月當行雖為鏡智房増幸順役為重服之間東光房祐弁代僧

仁勤之砌、以懇志奉表背衣之处也、伽藍安穩人法相續而已

開眼供養 圓福院頭成

院主 法印 三光房叡欽

寺家 權長吏 西方院覺教

公文所 法印權大僧都行仙房覺興

享祿三年庚寅二月廿一日

安原谷東光房 當行権小都祐弁

（47）角明浩「中世越前における豊原寺の再考察」（『山岳修験』四八号、二〇一一年）。

池田 越前禪宗草創期における豊原寺との接点 ―付越前出身僧古源劬元について―